【研究ノート】

“社会科学”を遡行する

馬場　宏二

旧稿「社会科学の語源学」[1]で，“社会科学”なる語の初出が，コント（Auguste Comte, 1798～1857）の「社会の再組織に必要な科学的作業計画」1822年を経てフーリエ（Charles Fourier, 1772～1837）『四運動の理論』1808年に遡り得ることを示した。その際，さらにコンドルセ（Condorcet 1743～1794）に遡れることを掴みかけていた[2]。ところが当時コンドルセについては全く知識がなく，探索をそれ以上進める術がなかった。術が見当たらないと興味も沸かない[3]もので，以後進展なしに十年を経た。それがつい先日，例によって偶然のきっかけから，“社会科学”がコンドルセ『人間精神進歩史』に使われていたことに気づいた。コンドルセまでは確かに遡れる。結論を絞ればこれだけである。本誌に相応しい主題か否かいささか気がかりだが，経営学は社会科学の内に入るから当然適当な主題だと説く若手の同僚もいるので，探索の経緯を略記して稿とした。

Ⅰ．岩波文庫の間欠的増刷

かつては世界の古典を網羅すると気負っていた岩波文庫が，厳しい出版事情のためだそうだが，近頃では大抵の既刊を品切れにし，出版の権利は保持しているから，売れそうな本を売れそうな機会だけに増刷するようになった。無論新刊は滅多に出さない。筆者のように学説史や思想史の領域を後回しにして買い溜めをせずに来たものにとっては不便この上ない。この文庫にしかない古典邦訳が結構あるのに，思い立ったからと言って買えるわけではなく，増刷されてもその時見逃すとまた買えなくなる。本稿で述べる出来事が生じた理由も，半分はこうした岩波文庫の営業政策のせいである。

さて，二・三年前，書店に岩波文庫のコンドルセ『人間精神進歩史』全２冊[4]が並んでいるのに気づき，何時か要るかも知れないと思って買い込んだ。フランス思想史は全く専門外で，コンドルセの名もかろうじて覚えていただけである。買い込んだのは，以前の“社会科学”語源探索に際してどこかで名が出たからに過ぎない。なお，一応新刊のコンドルセ他『フランス革命期の公教育論』[5]とサン・シモン『産業者の教理問答』[6]も隣にあったので同時に買った。いずれも同じ関心からである。

コンドルセを買ったといってもすぐ読んだわけではない。今年定年になって多少時間が出来たが，だからといっていきなりこの種の未読の古典の読破にかかるほど生真面目な学徒ではない。実は今年は猛暑で，昼寝でもしなければ体に障る。そこで盛夏に入ったある日，昼寝の準備に書架を探した。面白そうな本があったらそれを読みながら寝付こうという了見である。面白いとは期待しなかったが，コンドルセの『人間精神進歩史』を読んでないことは確かなので，取り出してページを捲りながら寝転んだ。呆れたことに，ごく初めの方で“社会科学”に出くわした。七・八年前に新渡戸稲造『武士道』を読んで『資本論』に出くわした[7]のと全く同じである。そこで改めて机に向かって全ページを読んだ。といっても，論理を熟読するというよりは“社会科学”や，関連する諸科学，哲学の類の語がどう使われているかを見る，いわば単語拾いに近い読み方である。だがそれでも収穫はあった。後に『フランス革命期の公教育論』も『産業者の教理問答』も当面の目的に役立つことが判った。

Ⅱ．コンドルセ公教育論の“社会科学”

コンドルセの全体像を知らないまま虫食い的探索を始めた。泥縄でコンドルセについての先行研究を二点[8)9)]だけ読んで見たが，いずれにも“社会科学”の用語史は出てこない。大東文化大学図書館が仏文のコンドルセ著作集[10)]を持っていることに気づいたものの，それを急いで読んで思想の全貌を掴むといった離れ業が出来るほどフランス語を読めるわけでもない。とりあえず手元の岩波文庫から“社会科学”を拾い出して，著作集の原語と照合して見た。『フランス革命期の公教育論』中の「公教育の全般的組織についての報告と法案」（以下「報告と法案」と略記）に二度｛仏文『著作集』なら計四度[11)]｝，遺著『人間精神進歩史』の邦訳岩波文庫版に五度出てくる。まず公教育論を見る。

A.「報告と法案」の，教育を五段階に区分する叙述の冒頭，初等学校の諸教科の中に“社会科学”が出てくる。読み書き，算術，簡単な測量，地方の産物や農業と工芸の技術の初歩，「基礎的な道徳観念と行為の規範」，最後に「子供の理解できる範囲での社会秩序の原理の説明」とあり，その直後の日曜ごとの公開講座に触れた中に「初等学校では，社会科学 science sociale の基本的真理がその適用に先だって教えられる」[12)]とある。この提案は，掘り下げればフランス革命の状況やコンドルセ自身の持つ啓蒙主義的進歩主義史観と関わるが，当面身も蓋もない言い方で片づけると，この際の「社会科学」は「子供に理解出来る範囲での社会秩序の説明」の言い換えに他ならず，その範囲なら戦後日本にアメリカから持ち込まれた「社会科」である。社会に関する常識という意味であって体系的学問としての社会科学ではない。ただそこに，市民の自立を要求する改革主義的啓蒙思想が強めに盛り込まれている。それが「原理」である。

ともかくこれが，管見の限りで，“社会科学”の初出である。これは1792年２月に公教育委員会で承認され４月に立法議会で報告提案された[13)]というから，その時までにはこの語は成立していたのであろう。これがコンドルセ自身の創案語であるかどうかすぐには解からない。しかし，

おいおい見るように，哲学と科学の区別はすでにあり，科学が，自然科学と道徳・政治科学と呼ばれる分野とに区分されることも常識化していたと見て良いから，あるいはもっと前からあった語かも知れず，あるいは革命と関わって市民の自立を強調すべく自ずから成立した語だったかも知れない。

B．これにすぐ続く中等学校の教科に，技術に必要な数学，博物誌および化学の基礎知識，道徳と社会科学 science　sociale[14]の原理についてのより広範な説明，商業の基礎的講義，とある。この際の“社会科学”も，学問としての社会科学ではなく，市民の自立の強調を含む社会科的常識であろう。

C．上記邦訳の「報告と法案」の中に現れる“社会科学”はこの二つだけである。しかし仏文『著作集』には，法案部分に，上級の学校の教科として“社会科学”が後二つ含まれている[15]。

第三段階目の「学院」の教科は，教授配当と関わって，第一級数学・自然科学 Sciences mathématiques et physiques，第二級道徳政治科学 Sciences morales et politiques，第三級諸科学の技術への応用，第四級文芸・美術と四つに括られており，この第二級の内訳は，感覚と観念の分析，道徳，科学の方法・論理学，国制の一般原理，法律・政治経済学・商業の基礎知識，地理学・諸国民の哲学的歴史，とされている。内容的にはこの第二級が，今日の社会科学にほぼ相当するが，「社会」の語は出てこない。

その上の「リセ」では，第一級数学・自然科学，第二級道徳政治科学，第三級科学の技術への応用，第四級文学美術となっているが，その第二級道徳政治科学 Sciences morales et politiques の内訳は，これも教授配当と関わって，科学方法論・感覚と観念の分析・道徳と自然法，ついで社会科学 Science sociale・政治経済学 économie politique・財政・商業となっている。“社会科学”はここに一度出てくるが，経済系の学問に近いものと考えられている。

最高段階の国立科学芸術院も四つの部門に分けられる。第一級数学自然科学，第二級道徳政治諸科学 Sciences morales et politiques，第三級科学の技術への応用，第四級文学・美術。この第二級が，形而上学と道徳感覚の理論，自然法・人権・社会科学 science sociale，公法と法律，経済学 économie politique，歴史，と五分されている。ここにも“社会科学”が登場するが，ここでは経済学とは離れて，人権論に近い位置づけになっている。

D．渡辺誠著『コンドルセ』[16]は，コンドルセの教育体系についての均整の取れた解説書であるが，「リセ」の教育科目第二部の中に“社会科学”があり，また「学会」の第二部道徳および政治学の中に“社会科学”が含まれることになっている。岩波文庫の現行邦訳よりこの方が「報告と法案」の仏文に近い。著者は『人間精神進歩史』ばかりか「報告と法案」旧訳版の訳者でもあるらしいので，解説においても当然それを基礎にしたものと思われる。

Ⅲ．『人間精神進歩史』の“社会科学”

E．この本は1793～4年，コンドルセがジャコバン政権に追われて隠遁中に書き，書き上げた

後に逮捕され自殺した作品で，彼の思想を表明した最大の著作であるが，死後すぐに出版されていたもののようである。従って“社会科学”の用例としては，上記公教育に関する「報告と法案」以後間もなくのものである。

邦訳では冒頭に「総説の巻頭におかるべき序」というコンドルセ自身の文章がある。筆者はこれでコンドルセの“社会科学”に初めて接したのだが，邦訳が原著者の意向を汲んでこの文を冒頭に置いてくれたおかげである[17]。さてそこでは，著作の目的は人間の学問を一般的に取り扱うことではないと限定しているが，その文脈で「知識に関する現象そのものやわれわれの道徳感情に関する性質や作用，社会科学に関する全体系 le systéme entière de la science sociale…」は詳細に解明しない[18]とある。実際，本文には発生史的には結構詳しい叙述があるのに学問体系一覧図は現れない。

F．つぎに“社会科学”が出現するのは，第五期「学問の進歩，その分化から衰退まで」の章である。その直前の第四期でギリシャ時代が扱われ，そこで科学の哲学からの分化，国際法，国家構成，法律，「今日経済学なる名で知られている広汎にして有益な技術 art si vaste, si utile, connu aujourd'hui sous le nome d'économie politique，さらに経験科学としての政治学 politique une science étendue…une science de fait が論じられていた[19]。

第五期はギリシャ末期からローマ時代を扱う。当面の主題と関わって摘記すれば，ギリシャが没落したので政治学は没落した。ローマは政治学を生まなかった。法律学は近代がローマに負う唯一の新しい学問であるが，そこでは，生まれつき学問に向く人を富貴や昇進のために役立つ手段として引きつける学問となっており，こうした国では科学や哲学は軽視される。「自由が滅びかけた動乱のさなかにあっては社会科学 science sociale が移植せられ，完成されることはありうべくもなかった」[20]。この時代のキリスト教の勝利は科学と哲学の完全な頽廃の信号」だった。自然科学の知識はキリスト教にとってはおぞましく胡散なものであった。

G．岩波文庫『人間精神進歩史』の下巻には各時期についての「歴史的断章」が納められており，量的にはこの方が長いが，ここに“社会科学”が三回登場する。

a．まず，第五期の歴史の断章に，「進んで形而上学や社会科学 sciences métaphysiques et sociales，人間そのもの，その知性や感情，他の人間との道徳的関係などを研究の目的とする学問」[21]との表現がある。これが前記「報告と法案」に含まれた第二級の学問であることは明らかだが，ここでは“社会科学”の語が明示されている。

b．第十期の歴史の断章には，各個人にとってその理性を働かせるために必要な知識，として三項挙げられる，すなわち，(一)人間のもろもろの権利についての合理的分析的知識，(二)社会科学の一般原理についての知識 la connaisance des principes généraux de la science sociale[22]ここでは社会科学は，自国の憲法と法律についての知識と言い換えられている。(三)公共学についての初歩知識…de l' économie publique。

c．最終の「アトランティード，すなわち学問の進歩のために人類が結合する努力についての断章」にはこうある。「…これら学問の助けなくては，社会科学 les sciences sociales の提供する

問題の大部分を完全に解決したり…することはできないのであるから，社会科学 sciences sociales は数学や物理学に関係がないであろうか」[23]。

H．コンドルセ自身の「社会科学」の用例について筆者が知っているのはここまでである。これを手がかりに彼の学問体系論を近代科学論の源流の一つとして取り上げる意味はありそうだが，それは思想史家の仕事である。ここでは彼の学問論，哲学の意義を認めながらも科学との関係においてその役割を極力限定しようとする傾向が，宇野弘蔵の社会科学体系論と奇妙に一致していることに注目するだけにしておく。コンドルセは諸学のうち数学的把握が可能になったものを科学だとし，宇野は経済学の原理論を基軸とする三段階論を社会科学の方法としたうえでそれを人文科学の諸領域に及ぼす指向を示していたから，直接には両者は正反対を向いているが，認識の正確さにおいて科学が哲学を上回ると言う科学優先主義が共通していたのであろう。

Ⅳ．コンドルセ以前

コンドルセの“社会科学”がどこまで明確な概念を持って用いられたのか解からないところがある。公教育体系論では，初等教育の教科に入っているから全社会に共通了解が成立していたようでありながら，中間の「学院」では明示されておらず，「リセ」や国立科学芸術院には出てくるものの，経済寄りと，理念・法律寄りで一貫していない。哲学とか科学とかあるいは自然科学とか道徳・政治科学とかの場合ほどに既知の語としては用いられていない。コンドルセ自身が自明の語として使ったのか主張を込めた創案語として毎回考えながら使ったのか判定出来ないのである。そこで彼以前の創案や用法の歴史を知る必要が出てきたが，あいにくとフランス思想史についてはズブのシロウトである。そこで，前史たり得る候補としては，例の百科全書[24]と重農主義者だろうと見当をつける傍ら，旧友の政治思想史家松本礼二氏とフランス経済学史に詳しい吉原泰助氏に，基礎知識や文献について手解きを受けた。有り難いことに，両氏とも快く応じてくださり，有用な知識を授けてくださった。

しかも予想外なことに，大東文化大学図書館が百科全書28巻を所蔵していたことに司書が気づいてくれ，貴重書室の中で初めて現物にお目にかかった。もっとも，すぐ使いこなせる力量はないから，とりあえず Science sociale の語が出てくるか否かを調べた。結論を先に言うと，およそ出てこない。アルファベット順の項目にもないし，第一巻冒頭に「人類の認識体系一覧」があるが，そこにも含まれない。因に，「人類の認識体系一覧」は，大東文化大学所蔵本（1772年刊ジュネーヴ版）では，以下のごとくなっている。

まず，全体が，物的存在，記憶ないし歴史，理性ないし哲学と区分され，最後の哲学ないし科学が，神の科学，人間の科学，自然の科学，と三分される。神の科学は存在論・精神科学・形而上学・神学・黒魔学。

人間の科学は真実 verité に関わる論理 logique と徳 vertu に関わる道徳 morale に分かれ，前者は自然例 jurisprudence naturelle，家族例 jurisprudence Œconomique，社会例 jurisprudence en société

とに分かれる。自然例は個人の義務，家族例は家族の義務，社会例は社会の義務，の科学である。

ここまでが科学の領域だが，人間の認識としてさらに想像と詩想があり，これがさらに，叙事・戯曲・寓話と区分されている。

この「一覧」の直後にF. ベーコンの学問体系が提示され，それと百科全書派自身の学問体系が対比できるようになっている。

先に見たコンドルセの公教育体系や学問体系がこの大枠に沿って構成されていることは明らかである。一般に百科全書は18世紀末フランス知識人の共通理解になっていたであろう。コンドルセを数学者として世に出そうとしたのが百科全書の編集者ダランベール（J. D' Alembert, 1717～1783）だったこと[25]を想起すれば関連はなおさら深いのかも知れない。

とは言え百科全書には“社会科学”は出て来ない。一橋大学社会科学古典資料センター所蔵の百科全書索引巻（Table Analytique et Raisonnée）を見ても，science sociale も後に言及する Art sociale も出て来ない。吉原泰助氏のご教示で『百科全書と社会科学』なる，この際魅力的な本[26]にも当たって見たが，主題は百科全書における今日風の社会科学概念の形成であって，辞典項目としての“社会科学”については言及はなかった。もっとも政治算術 Arithmétique Politique なる項目への言及はあり，唆られて百科全書の該当項目を引いてみたら，ペティ説を中心としたきちんとした紹介なので，ペティ（Sir William Petty, 1623～1686）がフランスに結構知られていたことを捉える良い資料にはなった。

シロウト探索がぼつぼつ行き詰まってきた頃，松本礼二氏が，ご存じかも知れませんがとの礼辞付きで，ベーカーの英文論文「社会科学なる術語の初期の歴史」[27]を送ってくださった。横文字の関連論文を自分で探すほどマメではないから無論初見である。やや古いが，大変目の詰んだ論文で，初めから知っていればこんな苦労はしなかった。と言うよりは，シロウト探索そのものを始める気がしなかったろうから，コンドルセにも百科全書にも触らぬままに生涯を終えることになったろう。それが出来たのは松本氏のこの上ない好判断のおかげだが，私からすればこれは怠け者の功徳である。

さてベーカー論文をこの際の要点だけに限って見ておく。1950年代末までの研究では“社会科学”の初出は1808年のフーリエの本であり，サン・シモン（Claude Henri de Saint-Simon, 1760～1825）派の用語をミル（J. S. Mill, 1806～1873）が導入して英語になじませた，とされていた。だがこれでは初出も英語化の経路も不完全である。初出について言うと，社会事象に自然科学の方法と技術を適用する試みは1780年代に盛んに行なわれたが，その代表がコンドルセだった。大革命の勃発でこれが実践の問題になった。1789年クラブの名で社会改造計画が公表されたが，そこには社会技術 Art　Sociale の語が使われていた。これまでの道徳哲学は個人ベースの幸福の追求だが，もっと体系的統合的社会科学が必要であり，全国レヴェルの幸福の維持拡大が必要である，それを社会的技術と呼ぶ，と。

因にこの社会技術 Art Sociale なる語は，すでに重農主義者の間で使われており，当時の「科学」と「技術」の使い分け方からして，この Art Sociale が Science Sociale の語源だった可能性が

ある。

1789年クラブはやがてジャコバンに食い込まれて勢力が衰えるが，それでも特にコンドルセとタレーランの努力で公教育体系に社会科学を含めた。またカバニスやデステュット・ド・トラシ（Déstutt de Tracy, 1754～1836）はフランス学院の道徳政治部門に座を占めた。デステュットは，道徳科学や政治経済学と対比しつつ，この語を純粋に政治的な語義を持つものと扱った。

“社会科学”は1789年クラブの議論の中で出てきたと考え得る。Science Sociale の語が残っている最初の文は，1791年12月の，前に会員だったガラ（Dominique-Joseph Garat, 1749～1833）がコンドルセに宛てた，百科全書の場合同様に知識人が協力する必要があると訴えたパンフレットである。

ベーカーの考証によって，“社会科学”の用法にコンドルセが示したいささかの動揺が了解可能になる。彼はこの語の唯一独創的な創案者ではなかったが創案者群中の有力な一人であり，多分最大の普及者だった。彼は同志の意向も念頭に置きながら，この語に社会改革の念願を込めて使っていたのである。ベーカーの研究を覆すような考証が現れない限り，“社会科学”の語源はコンドルセだと言って差し支えない。

この語はフランス大革命の中で，社会改革としての語義を初めから帯びて成立した。旧稿「社会科学の語源学」で述べたことだが，フーリエにしろサン・シモン＝コントにしろ，ユートピア社会主義者達は，この語を社会改良と関わる語として使っていた。彼らが語源はコンドルセであることをどこまで意識して使ったかは解からないが，時間的には僅か20年足らず後のことである。語感に社会改革を含むことは当然意識されていたであろう。文筆家としてそれは常識だったに違いない。

むすびに代えて——コンドルセ以後——

“社会科学”がコンドルセからコントへどういう経路で伝わったのかまだ充分に調べていない。だが，時代順にコンドルセ→フーリエ→サン・シモン→コントと伝わったのではなく，むしろコンドルセから直接コントが継承したのではないか。

『四運動の理論』[28]はまことに空想的詩的な構想の開陳であり，まさに空想的社会主義である。学問体系には関心を示していない。“社会科学”は二度出てくるが，理論的内容は全く解からない。前後の用語者と相互の言及もなさそうだから，フーリエは，他の論者とあまり関連のない孤峰だったのかも知れない。

これに比べればサン・シモンはコンドルセに深い関心を示しているし，コントの師でもあるから，中継点だった可能性はある。しかし，彼の発想にも，フーリエほどでないにしても飛躍が多く，学問体系を示すかに見えて果たしていない[29]。それに彼が“社会科学”の語を使ったのはコント以後ではなかったか。有名な『産業者の教理問答』[30]で，サン・シモン自身が書いた第一部と第二部には“社会科学”は見出せず，第三部がコントの筆になる「社会の再組織に必要な

科学的作業計画」[31]であって，そこに“社会科学”が多用されていた。この第三部にサン・シモンが書いた序文にはこの語が出て来，第四部でもその用法を受けた“社会科学”が出て来るが，この序文を巡って二人は喧嘩別れしてしまう。サン・シモンがコンドルセから引き継いでそれをコントに伝えたのではないのではあるまいか。

コントがコンドルセに親近感を抱いていたことは明らかである。大きな体系的思考も数学者として出発した経歴も共通する。頭の質が似ていて内的共鳴があったのではないか。「コントにおけるコンドルセ」についてほとんど基礎的知識がなく，何事か言えるような見識を持ち合わせているわけでもないが[32]，シロウトの直感としてこう言って見たくなった。この道の専門家になら反証はいくらでも挙げられるであろう。大方の御叱正を乞う。

註

1）馬場宏二『マルクス経済学の活き方』御茶の水書房，2003年，第一章（初出は1994年1月の口頭報告）

2）同上書18ページにコンドルセの名を挙げているから，知識はあったようだが，何故知っていたか思い出せない。この時最新の下敷きとして使ったのが，森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』1993年　有斐閣　だが，これにはサン・シモンとフーリエの名前が挙がっているだけで書名はなく，コンドルセは名前もない。コントの文章から示唆を得たか，あるいは『四運動の理論』を教えてくださったのは，その後亡くなった森博氏だったので，コンドルセの名も森氏が電話で付け加えられたのだったか。

3）コンドルセがフーリエから見れば直前の世代に属したことも，如何なる著作を書いたかも知らなかった。これではそれ以上進める気にはなれなかった。

4）コンドルセ著　渡辺誠訳『人間精神進歩史』第一部・第二部，岩波文庫，初刷1951年，現行刷2002年

5）コンドルセ他著　坂上孝編訳『フランス革命期の公教育論』岩波文庫，2002年。この訳書の看板であるコンドルセ「公教育の全般的組織についての報告と法案」は，渡辺誠訳『革命議会における教育計画』岩波文庫，1949年という先行訳があるらしいが，まだ見たことがない。坂上編訳書にはデステュット・ド・トラシーの「現在の公教育制度についての観察」も含む。

6）サン＝シモン著　森博訳『産業者の教理問答』岩波文庫，2001年。ただしこれは，後掲，森博編・訳『サン－シモン著作集』から選ばれたものである。

7）馬場宏二，前掲『マルクス経済学の活き方』第10章，初出は1996年10月

8）渡辺誠『コンドルセ』岩波新書，1959年

9）戸塚茂雄氏のご教示で森岡邦泰『深層のフランス啓蒙思想』晃洋書房，2002年を知り，その第四章「コンドルセ」から手繰って，森岡氏の連作「コンドルセの社会科学の概念」，「コンドルセの社会科学の歩み」，「コンドルセの社会数学」，「コンドルセにおける蓋然性の問題」，「社会科学方法論の一考察」，『大阪商科大学論集』No. 114～121，1996年6月～2001年6月を通読した。得るところは多々あったが，“社会科学”用語史には関心を示していない。望蜀の言を弄しておけば，コンドルセのペティ説継承の有無を論じてほしかった。

10）*Œuvres de CONDORCET* par A.Condorcet O'conner et M. F. A. Rargo, Paris Firmon Pidot frère 1847.

11）坂上氏の邦訳は，底本が上掲 *Œuvres de CONDORCET* でないらしいので，筆者には照合しきれない。

12) 上掲坂上訳17ページ，*Œuvres de Condorcet*, T. Ⅶ, p.455.
13) 前掲坂上訳10ページ
14) 前掲坂上訳25ページ，*op. cit.*, p.461.
15) *op. cit.*, pp.535～545.
16) 前掲渡辺誠『コンドルセ』岩波新書
17) 前掲渡辺訳『人間精神進歩史』。仏文『コンドルセ著作集』のままだと，この文は同書第二部の冒頭に来る。
18) 前掲渡辺訳第一部，14ページ，*op. cit.*, p.282.
19) 同上書，85ページ，*op. cit.*, p.74.
20) 同上書，108ページ，*op. cit.*, p.97.
21) 前掲渡辺訳第二部，194ページ，*op. cit.*, T. Ⅵ, p.183.
22) 同上書，310ページ，*op. cit.*, p.583.
23) 同上書，334ページ，*op. cit.*, p.608.
24) Encyclopédie ou Dictionnaire raisonnée des Science, des arts et des Métiers par une société…. これについての標準的とされる解説は，桑原武夫編『フランス百科全書の研究』岩波書店，1954年であるが，この「研究」は出版された百科全書の書誌学的記述を欠き，各版異同にも全く関心を示していない。どうやら版による記述の変更があるらしいのだが，筆者程度の探索では明示できない。
25) 前掲森岡「コンドルセの社会科学の歩み」『大阪商科大学論集』116号
26) René Hubert, *Les Science sociales dans L'Encyclopédie*, Slatkine Reprints 1970.
27) K. M. Baker, The earley History of the Term 'Social Science', *ANNALS of Science*, 20, 1964.
28) フーリエ　巌谷国士訳『四運動の理論』上下，現代思潮社，1970年。一瞥したところでは，上巻の16，60ページの二ヶ所に“社会科学”があるが，社会の理想的なあり方もしくはそれに至る計画といった意味のようである。因に後年1829年の作，田中正人訳「産業的協同社会的新世界」，五島茂・坂本慶一編『オウエン，サン・シモン，フーリエ』中央公論世界の名著，1985年には“社会科学”は使われていないようである。
29) 参照，森博編訳『サン-シモン著作集』全５巻，恒星社厚生閣，1987～1988年
30) 前掲森博訳『産業者の教理問答』岩波文庫，203ページ。
31) コント，霧生和夫訳「社会の再組織に必要な科学的作業の計画」，清水幾太郎編『コント・スペンサー』中央公論世界の名著，1980年。この中でコントは，コンドルセ『人間精神進歩史』を立ち入って検討した後，“社会科学”の語を計８回使っている。
32) 『コンドルセとコント』という名の書がある。両者の関係を知るのに絶好な文献のようだが，実は『田辺寿利著作集第二巻』未来社，1982年の副題であり，第一部「コンドルセの進歩主義哲学」，第二部「コントの実証哲学」の合本であって，両者の関係を主題とするものではない。それでも，第二部から，コントがコンドルセを尊敬し強い影響を受けていたことは窺える。

2004年８月９日～８月28日

追記――横着の報い

もともとこの探索は，語源はコント，英語化したのはJ. S. ミルという世の常識から出発した。実はこの常識もなかった人間がＯＥＤでそれを確かめ，コントについて確認した上でフーリエ，さらにコンドルセまで遡行したのだから，自分では上出来のつもりだった。ところがとんだ大揺

れがきた。結論的には転覆である。それも自分の横着のせいだから救われない。

脱稿後，念のためにＯＥＤを見直すことにした。それも手許にないので横着をして，佐藤史子氏にお手元のＯＥＤを見てもらうようお願いした。驚いたことにJ. アダムズとあるとのこと。これでは放っておけないから，改めて大東文化大学図書館に出かけた。なるほど1933年版と1989年の再版とがあり，再版には，Social Scienceの項が新設されている。1785年のJ. ADAMSの手紙に「人々が自分たちが権力の源泉であることを知り一致してそう見做すようにならなければSocial Scienceは改善されないだろう」とある由。そのつぎに1791年のD. J. GARATのコンドルセ宛の手紙，1811年のデステュット・ド・トラシの『法の精神注解』の英訳，と続く。Socialの語の中にも，初版同様「科学・理論について」の小項があり，ここもJ. S. ミルを入れるなど初版より詳しくなっているが，「Social Scienceの概念はコント氏に由来する」との文は，Social Scienceの項に移されている。ヤレヤレである。コンドルセでは止まらないらしい。

しかしこうなると，J. アダムズから調べなおさなければならない。多分アメリカ合衆国第二代大統領ジョン・アダムズだろうが，それもこれから確認する必要がある。始める前にＯＥＤを確かめておけばよかった。手抜きした報いでまた手間になった。しかし初めにアダムズに向かってしまったら，コンドルセや百科全書には向かわなかったかも知れない。横着をして道に迷ったおかげで，かえって楽しい思いをしたのかもしれない。

2004年9月10日